

暮らしナビ 暮らしスタイル

市民派 若手をスカウト

ガラスの天井 ⑤ 女性と政治

組織や政党に属さず、「市民派議員」として地方選挙に出ようとしても、個人の力ではなかなか難しい。そんな中、約40年前から、草の根で女性を議会へ送る原動力となってきた「地域政党」がある。「生活クラブ生協」の活動から誕生した、生活者ネットワークだ。同様の組織は都市部を中心に全国にあり、昨年10月現在で、9都道府県の地方議会に112人の議員が在籍している。

●生協活動から発展

生活者ネットは、各地域の消費者運動が軸となってきた。学校給食や地下水などの問題で、行政に直接請求を起すなどしたが相手にされず、不満を持った住民が、それぞれの地方議会でも候補者を擁立してきた経緯がある。1970年代、生活クラブ生協は、合成洗剤の使用が環境汚染につながるとして独自の粉せっけんを開発し、台所

●候補者が高齢化

そんなネットにも高齢化の波が押し寄せ、かつてほどの勢いをなくしている。ネットは会員の中から候補者を出し、サポートも会員。これまで候補者は40代が中心だったが、50代以上が中心になった。このため、会員以外から若手を擁立しようとする動きがある。今年4月の統一地方選に「品川・生活者ネットワーク」

の公認候補として、品川区議選に出馬予定の田中さやかさん(32)もその一人。東日本大震災後、脱原発を求めるデモや署名活動に参加する中で、ネットの会員たちの目に留まった。

「私は、子供たちの食の安全を守りたい。昨年12月末、寒風が吹きすさぶ駅前前で、2月に出産予定で大きなおなかの田中さんがマイクを握った。東京・生活者ネットの渋谷恵美子事務局長(55)は「意識の高い若い人もつながって幅広い支持を取り込みたい」と田中さんら新しい力に望みを託す。



街頭で演説する品川・生活者ネットワークの田中さやかさん＝東京都品川区のJR大井町駅前で昨年12月27日、吉永磨美撮影



未来政治塾の特徴は女性や若者の多さ。託児付きで、子連れで参加する人も。大津市で昨年12月20日、細川貴代撮影

1880年に女性参政権 一時獲得 楠瀬喜多さん 高知市の2町会で



日本で女性参政権が確立される前のはるか昔、高知県に参政権の獲得を訴えた女性がいた。楠瀬喜多さん＝写真・高知市立自由民権記念館提供。当時、県内では自由民権運動が高まっており、一時的に高知市内の2町会で女性参政権が実現している。「『民権ばあさん』楠瀬喜多小論」(公文豪著)などによると、1878年、42歳だった喜多は、高知で行われた小区会議員と呼ばれる自治体議員の選挙のやり方に不服を持った。選挙の参加は「戸主」に限られ、規則で女性を除外していた。喜多は、夫が病死し戸主だったが、女であるため参加できなかった。喜多は「選挙権を与えないならば、男子並みに『地租』『地方税』を納める義務はない」と税金を滞納。督促を受けた喜多は高知県庁に対し文書で「納税の義務だけを男子戸主並みに促すのは公の公正な取り扱いではない」と訴えた。1880年、基礎自治体の規則を自主的に定めることができることになり、自由民権運動が盛んだった、現在の高知市内にある二つの町会が「男女区別なく選挙権を与える」という規則を制定し、日本初の女性参政権が実現した。しかし4年後、法律が改正され選挙権は「満20歳以上の男子」に限られた。

●志育心塾も後押し

女性が選挙に出るきっかけや動機付けとなる、もう一つのケースは、政治を学ぶ塾や学習会への参加だ。

公益財団法人市川房枝記念会女性と政治センターは、半世紀以上にわたり、所属政党にとらわれず、女性の政治活動を支援し人材を育成する中心的な役割を担ってきた。大正から昭和にかけて、女性参政権を求める「婦選運動」を主導し、戦後は参院議員を5期25年務めた市川房枝さん(1893～1981年)が、1962年に創立した機関がその前身になっている。

●子育て世代も参加

未来塾は、子育て中でも参加しやすい環境を整え、託児サービスを用意しているのも特徴。京都府八幡市のパートナー、小椋裕美さん(34)は、生後2カ月の三女と夫(37)とともに参加した。小椋さんは「女性が生きにくい社会だと感じている。子どもたちにもっと生きやすい社会を創るために、まず政治が変わるべきだ」と話す。嘉田塾長が「生活現場に近い地方議会から変化を起すことが重要だ」というように、未来は地方から切り開かれていくだろうか。

介護の間に

10年ほど前、夫が脳内出血で倒れ、医師から「意識障害、右手足障害、まひが残り、車椅子を考えてください」と言われた時は、頭が真っ白になりました。しかし毎日、子供たちとともに夫のリハビリに全力投球しました。夫は少しずつ回復し、今は7割くらいまで体の機能が戻りました。

私は、介護ばかりの毎日では自分自身が落ち込みがちで、介護の間でも自分の時間を持たたいと思いま

女の気持ち 2015.1.6

した。そして、子供の頃からあこがれていたピアノを始めようと考えました。私の子供の頃といえば、ピアノは学校の音楽教室に1台しかない時代です。音譜も読めず何もかも初めてでした。幸いにも良い先生に会い、分かるように教えていただきました。まさか10年も続けられるとは思っていませんでした。年2回の発表会にも何回も出席できました。最初は「嫌」と思っていました。先生に「挑戦してみれば」と言われて、出席することになりました。この

年になれば、ドキドキ感なんてなくなりそうです。発表会になると心臓が飛び出しそうです。失敗しても達成感があります。すごい刺激でした。この年齢になっても、何事もまだ成長するんだということが分かりました。夫の介護の間にも思っていたピアノですが、今では何よりの私の楽しみです。夫が病気をしていたら、ピアノに縁はなかったのかなと今は夫に感謝です。さいたま市緑区 野上 佑子 主婦・71歳

食卓の一品

イワシのかば焼き

1人前 409kcal、塩分 4.3g

《主な材料》(2人分) イワシ(開いたもの) 4匹▽強力粉適量▽ゴボウ1/4本▽A(しょうゆ大さじ3、酢、砂糖各小さじ1、チキンスープカップ1/2)▽ごま油大さじ2▽粉サンショウ適量

《作り方》 ①イワシは尾の部分落とし、皮目に5分間隔で包丁目を入れ、強力粉をまぶす。ゴボウは皮をこそげて縦半割りにし、たたいて食べやすい長

さに切る。 ②フライパンにごま油を熱し、イワシを皮目を下にして並べ入れ、ヘラで押さえつけて焼く。上下を返して同様に焼き、取り出す。ゴボウを入れて炒め、Aを加えて煮立て、イワシを戻し入れ、タレが半量になるまで煮詰める。 ③器に盛りつけ、フライパンに残ったタレをかけ、粉サンショウを振る。

料理研究家 松田美智子